



変わりゆく学術団体の使命

縣 秀彦

今年、すばる望遠鏡20周年、アポロ月着陸50周年、そして国際天文学連合（IAU）設立100周年の記念年を迎えた。それを祝うかのようにブラックホール光子球の撮影成功や、はやぶさ2のリユウグウでの活躍などが報道されている。その一方、ハワイ島マウナケアでは、新たな超大型望遠鏡TMT（30m望遠鏡）の建設を巡って、山頂を聖地と仰ぐ先住民からの反対運動が起こるなど、大型プロジェクトの進め方、合意形成の在り方などが問われている。いずれも一世紀前には想像すらできなかったことであろう。

IAUは、昨年8月にウィーンで開催した第30回総会で「IAU戦略計画 2020-2030」を全会一致で採択した。この計画では①研究者の活動・交流の推進、②天文学のインクルーシブな発展、③社会発展のための天文学利用、④天文学をすべての人々に、そして⑤初等中等教育に天文学を——という5つの目的が明記された。100年前に①のみを目的に設立されたIAUが、一世紀後には社会のための国際学会と変貌していることを注視してほしい。実際、IAUは2019~21年度予算で研究活動への支出が30%なのに対し、それを上回る42%を天文学の教育・普及に支出する予定だ。知識のための天文学のみならず、開発のための天文学、社会における天文学、社会のための天文学等を強く志向していることが分かる。

基礎科学の一分野であり、かつもっとも古い学問

でもある天文学は、他の学術分野に先駆けて、吉川弘之議長が1999年に取りまとめたブダペスト宣言（科学と科学的知識の利用に関する世界宣言）の社会実装に取り組んでいる。それは、科学が20世紀にタコツボ化し、その成果が世界大戦にも利用されたことを反省し、知識のための科学のみならず、平和のための科学、開発のための科学、そして社会における科学と社会のための科学を目指すという宣言であった。世紀の境目に科学者が自ら過去を総括した結果、学術団体（学会）の果たす役割が大きく変化しつつある。しかし、その理念の実装は特に日本国内においては、いまだままならないのが実情だ。

日本の科学の失速が懸念される中、自然科学14分野のうち天文学分野のみ、論文数の増加が世界平均を上回っており、論文数の世界シェアも14分野中1位となっている。国際競争力が高まった日本の天文学は、学術成果の探究のみならず平和や開発、そして社会への寄与を決して怠ってはならない。

国内組織に相当する日本天文学会の予算や活動内容は、IAUの理念とは程遠いものの、日本学術会議の他分野に先駆け、平和と天文学について2年近い議論を重ね、今年3月には声明「天文学と安全保障との関わりについて」を発表したことを評価したい。そして、その理念が広く他分野でも共有されることを願って止まない。

（JASTJ理事／国際天文学連合国際普及室長／国立天文台普及室長）

CONTENTS

巻頭言	1
報告 科学ジャーナリスト世界会議	2
ローザンヌで開催／CERN訪問記／世界連盟に3団体参加／セッション報告“漫画で語る科学” ほか	
ニュース	5
筆者と語るブックカフェ／AI連続勉強会／科学ジャー	

ナリスト塾開講 ほか	
例会報告（6月）SDGsと人類の未来	7
例会報告（7月）ウェブジャーナリズム	8
会員だより 科学ジャーナリスト塾で学んだこと	9
オピニオン／WEB編集長から	10
事務局だより	12

スイスで科学ジャーナリスト世界会議 世界83カ国から千人以上が参加

WCSJ2019 / WFSJ

第11回科学ジャーナリスト世界会議 (WCSJ2019) が7月1日から5日間、スイス連邦工科大学ローザンヌ校 (EPFL) のキャンパスにあるスイステック・コンベンションセンターをメイン会場として開かれた。世界83カ国から千人以上が集まり、「SKILLS AND TOOLS」「IDENTITY AND VALUES」「SCIENCE AND BEYOND」「FUN AND ENTERTAINMENT」の4つのテーマのもとで最先端の科学の話題や



科学報道のあり方、抱える課題などを議論した。全体的に先進国スイスらしい洗練された運営がなされ、参加者の満足度は高かった。

科学ジャーナリスト世界会議は最初に東京で1992年に開かれ、21世紀に入ってからはほぼ2年に1度のペースで開かれてきた。今回の会議では63のセッション、7つのワークショップや5つの記者会見などが設けられた。地下の展示会場には38団体がブースを出し、研究機関や国際組織などがそれぞれの活動を紹介した。

JASTJからは会員10人が参加、会員外も含めた日本人の参加登録者は24人だった。国立天文台と理化学研究所が共同で、また北海道大学が単独でブース

を出していた。

主催者発表によると、参加国とその登録人数は多い順にスイス (255)、米国 (139)、英国 (105)、フランス(91)、ドイツ (75)、イタリア (46)、ベルギー (33)、フィンランド (26)、日本 (24)、カナダ

(23)、インド (19)、ロシア (18)、スウェーデン (17) …となっており、日本は堂々の9位。総計は1137人で、60%が女性だった。

JASTJは参加者に支援金を出すための寄付活動を2019年1月から展開し、旅費等がどこからも出ない会員に費用の一部を支援金として給付した。

(理事 高橋真理子)



大ホールのステージに映し出された主催団体のロゴ。左からスイス科学ジャーナリスト協会、イタリアサイエンスライター協会、フランス科学ジャーナリスト協会、世界科学ジャーナリスト連盟。



世界の38団体がブースを出した地下の展示会場には、いつも人が絶えなかった。(撮影 いずれも高橋真理子)

CERN訪問記

WCSJ2019 / WFSJ

最先端の研究機関で感じたこと

科学ジャーナリスト世界会議ローザンヌ大会の会期中に、ジュネーブ郊外のスイスとフランスの国境にまたがる欧州合同原子核研究機関 (CERN) を見学する機会を得たので報告する。世界会議の事務局が用意してくれた見学ツアーはすぐに満席になったが、JASTJの働きかけで特別に日本人向けの見学ツアーが7月4日に実現した。世界トップレベルの素粒子物理学の研究所であるCERNには、全長27kmの円形加速器があり、2011年のヒッグス粒子発見な

ど輝かしい成果を挙げ続けている。

見学して痛感したのは、素粒子物理学の最先端を支える外縁の広さと深さだ。CERNは、加速器実験の結果である大量のデータの処理や保存のために、いつも最先端の情報通信技術 (ICT) が試され続ける環境にあり、インターネットの基幹技術であるHTMLやWWWを生み出した場だ。常勤スタッフは約5千人、さらに常時1万人から1万5千人の研究者や学生が滞在している。出身国や文化の異なる

人々が協力して長期間の研究生活をするためには、幅広いマネジメントが必要になる。家族の暮らしへの関心も、子どものケアや教育に対する配慮も欠かせない。

論文や新発見の数々は、世界中の科学メディアで紹介される。しかし、それらの成果を支える外縁を一般の人々が意識する機会は少ない。ともあれ車椅子の私が十分な合理的配慮を受けられたのは、1954年の設立以来の営みの蓄積ゆえだろう。私は地下の実験設備の一部に入れなかったこと以外、何ら不便

なく見学し、ワクワクすることができた。

(理事 三輪佳子)



地下に設置された円形加速器の実験設備を見学するJASTJ会員ら

(撮影 三輪佳子)

セッション報告 “漫画で語る科学” に手ごたえ

「最先端の科学をどう伝えるか」は科学報道にとっては永遠の課題の一つだが、今回の科学ジャーナリスト世界会議(WCSJ)では「レッツマンガ 漫画で科学を語ろう」と題したトークセッションが開かれた。このセッションに日本から理系漫画家のはやのんさんが講演者の一人として参加した。JASTJの会員ではないが、このセッションの内容や参加して何を感じたかについて寄稿してもらった。

理系漫画家ははやのんです。私はこれまで20年ほど、理工系、科学の面白い話題や研究開発を漫画で紹介する仕事に取り組んできました。今回の科学ジャーナリスト世界会議には人間文化研究機構の高祖歩美さん、理化学研究所国際広報のアマンダ・アルバレスさんが企画したトークセッション「レッツ



トークセッションで「サイエンス漫画の仕事」について話すはやのんさん=右端
(写真提供 Asian Scientist Magazine)



Hayanon
from Japan
Science Education Manga

Science Manga Artist

はやのんさんが「学習漫画」をアピールするために描いたイラスト (提供 はやのん)

マンガ 漫画で科学を語ろう」の登壇者として参加し、米国在住イタリア人のマテオ・ファリネッラさん、英国在住イタリア人のクラウディア・フランドーリさんという漫画家と一緒に「サイエンス漫画の仕事」について発表しました。

プレゼンテーションでは、日本における漫画の分類、特に「学習漫画」というジャンルがあることを紹介し、子どもだけでなく大人も漫画を楽しんだり、漫画を通してさまざまなことを学んだりしているという社会背景があることを語りました。各国からのジャーナリストを中心とする参加者に接して、漫画によるサイエンスアウトリーチという手法に興味を持っている人が多いという感触を得ました。

英語版、その他の言語版での出版を増やして、外国の人々に日本の研究開発をもっと知っていただけるようにしていきたいと改めて決意しました。

(理系漫画家 はやのん)

次回大会はコロンビアで開催

WCSJ2019 / WFSJ

科学ジャーナリスト世界会議(WCSJ)の次回大会は、2021年に南米コロンビアの第二の都市メデジンで開かれる。大会招致にはカナダのモントリオールも立候補したが、これまで開催地が北半球の先進

国に偏りがちだったことなどが配慮され最終的にメデジンに決まった。

大会2日目の7月2日に公開で行われた招致プレゼンテーションでは、世界科学ジャーナリスト連盟

(WFSJ)の事務局があるモントリオールは04年の第4回大会の開催地でもあり、大会運営のノウハウがあることを訴えた。これに対しコロンビア科学ジャーナリスト協会は、これまで世界大会の開催地が北半球の先進国に偏りがちだった点を指摘、これからは経済発展が遅れがちな南半球の国や地域からの視点を重視すべきだという「グローバル・サウス」に焦点を当てる重要性を説いた。

このプレゼンの後、国際的なイベント・マネジメ

ント会社であるMCIとの提携が発表された。これまではWFSJと大会開催国がそのたびに組織委員会を作って世界会議の準備と運営に当たってきたが、今回の提携によってそうしたノウハウが途切れないよう継承していく。これによって開催地が北半球の先進国に偏らないようにしようという動きである。今回の世界会議の閉会式で「2021年はメデジンに決定」と発表されると、コロンビア代表は壇上に駆け上って喜びを表した。(会員 清水健)

世界連盟に新たに3団体参加

WCSJ2019 / WFSJ

世界科学ジャーナリスト連盟(WFSJ)の総会はローザンヌ大会会期中の7月3日、スイステック・コンベンションセンターの一室で開かれた。事務局長クリストフ・ブリヨン氏の司会で始まった総会には、41の加盟団体の代表が集まり、日本からはJASTJを代表して小出重幸理事とロンドン在住の科学ジャー



世界科学ジャーナリスト連盟の総会ではカメルーン、ロシア、クロアチアからの団体参加も決まり参加組織は合計61団体になった (撮影 小出重幸)

ナリスト清水健氏、日本医学ジャーナリスト協会を代表して小島あゆみ氏が出席した。

2019年の理事選で選ばれた3人の新理事のうち、ルーマニアのアンドレア・フィスクタン、インドネシアのハリー・スルジャディ両氏があいさつ。英国の新理事、サニー・ベインズさんは欠席だった。また、新たにカメルーンのACJ Prosante Cameroon、クロアチアのCroatia Association of Science Writers、ロシアのAKSOMの加盟が承認され、参加団体は合計61となり、所属メンバーは1万人を超えた。

総会では、18年会計報告、19年予算案などを承認した。フランス出身のブリヨン新事務局長は、国連やNGO事務局での経験が豊富で、実務能力が高く、これからのWFSJの活動を支える人材として、頼もしさを感じさせた。(理事 小出重幸)

日本人参加者で懇親会

WCSJ2019 / WFSJ

ローザンヌ大会3日目の7月3日、JASTJの呼びかけで日本人参加者16人が夕食会に集まり、懇親を深めた。

会場はレマン湖のほとり、ウシー港に臨む「Le Vieil Ouchy」というレストランでスイス料理を囲んだ。季節外れとはいえ、スイス観光の醍醐味の一つであるチーズフォンデュは絶品だった。

食事をしながらの話題は、世界会議のプログラムから冷房設備がないホテルで過ごす寝苦しい夜の時まで、尽きることがなかった。お開きとなったのは夜9時過ぎ。日はまだ沈んでおらず、何人かは次な

る場所へ繰り出した。(理事/副編集長 柏野裕美)



JASTJの呼びかけで懇親会に集まった16人。レマン湖のほとりのレストランで食事をしながら懇親を深めた。(提供 小出重幸)

賛助会員交流会

毎年夏の恒例となった賛助会員との交流会が8月27日、第11回科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ）ローザンヌ大会の報告会を兼ねて東京・内幸町の日本プレスセンター8階会議室で開かれた。賛助会員12団体から23人、JASTJからは会員が28人と多数参加し、にぎやかな立食パーティーとなった。

室山哲也副会長の司会で、初めに瀧澤美奈子副会長が歓迎のあいさつをした後、佐藤征夫監事が乾杯の音頭を取った。続いて高橋真理子理事と小出重幸理事が世界会議の報告をし、滝順一副会長がJASTJの活動状況を報告した。

後半は賛助会員からのスピーチが続き、構造計画研究所の服部正太社長は「エスカレーターに乗るときは



科学ジャーナリスト世界会議ローザンヌ大会の報告会を兼ねた賛助会員との交流会で乾杯する参加者たち
(撮影 柏野裕美)

2列で立ち止まって」と訴えるNHKのキャンペーン報道を評価、新たに入った日本アイソトープ協会、豆蔵ホールディングス、量子科学技術研究開発機構の代表者らもあいさつの言葉を述べた。自由に意見交換する時間もたっぷりあり、賛助会員、会員は約2時間になんとか互いに懇親を深めた。（理事 高橋真理子）

AIビジネスの現場を知る 連続集中勉強会始まる

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）は人工知能（AI）を応用したビジネスの最前線を学ぶため、短期集中勉強会「AI企業の本音～私たちは社会をどう変えていきたいのか」を始めた。

第1回は、東京大学の松尾豊教授を招いて8月26日に日本プレスセンタービル会議室で開いた。ディープラーニング（深層学習）技術がもたらす変革について最新動向を聞き、講師と参加者の間で意見を交わした。この中で松尾教授は「米国の巨大プラットフォーム企業の支配に対抗するには意欲ある若者に活躍の場を与えることだ」と強調した。参加者は非会員を含め51人と大盛況で、AIに対する会員の関心の高さをうかがわせた。

2回目以降は、AIやITの分野で最前線を走る企業



9月4日の第2回AI集中勉強会で講師のデジタルトランスフォーメーションについての話聞き入る参加者たち。
(撮影 高木勲生)

責任者を講師に招く計画だ。9月4日の第2回には、情報サービス企業などを傘下を持つ豆蔵ホールディングスからITの浸透が社会や企業活動をあらゆる面で根底から変化させるという「デジタルトランスフォーメーション（DX＝デジタル化）」をテーマに話を聞いた。

まず豆蔵の中原徹也社長が事業の概要を説明、「日本の企業はデジタル化に関し欧米に比べて5～10年遅れている」と指摘。その後、IT戦略支援事業部の安井昌男部長がデジタル化によって社会がどう変わるかについて話した。安井氏によれば「デジタル化の本質は、文書であれ画像であれすべてが数値化され計算可能になることだ」という。それによってこれまで人手を煩わしてきた多くの業務が自動化できるという。デジタル化に対応するため豆蔵では人材育成のプログラムを開発し顧客の要請に応じているそうだ。

質疑応答では、「数値化」という表現について「具体的なイメージがわからない」との指摘があり、安井氏は「一つの記事が社会面に適しているのか、経済面向けなのかを（数値化によって）機械が判断できるようになる」とメディアの仕事を例に挙げて説明した。ただこの説明でも、腑に落ちたと感じた参加者は多くはないとの印象を受けた。急テンポで革新が進むITの最先端から目を離せないとの認識を新たにした勉強会だったと言える。参加者は24人だった。

3回目以降は、AI人材育成のNABLAS（9月19日）、スマート農業に取り組むオプティム（同26日）、医療画像診断支援のナプラス（10月9日）と続く予定。

JASTJが毎月1回開いているこれまでの例会とは別に、同じテーマの下で連続勉強会を開くのは初めての試みだ。
(副会長 滝順一)

サイエンス・ブック・カフェ 著者と語り合う科学書の魅力

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）の科学ジャーナリスト賞委員会は今年度から、話題の科学書の著者や科学書に関心を持つ編集者、書店関係者を招いて科学の本の魅力について語り合う「サイエンス・ブック・カフェ」を始めた。読み応えのある科学書に

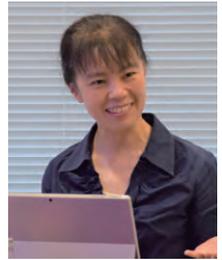


研究生の苦勞と首長竜の魅力について語る佐藤さんと話し合う参加者たち。（撮影 いずれも都丸亜希子）

出会う喜びを共有し、科学の魅力を伝える語り方について考える機会とする。科学ジャーナリスト賞（JASTJ賞）の選考の一助にもしていく狙い

だ。

第1回は「フタバズキリュウ～もうひとつの物語」の著者である佐藤たまき・東京学芸大学准教授を招いて7月13日に東京・内幸町の日本プレスセンタービル会議室で開いた。白亜紀に生息していた首長竜「フタバズキリュウ」の化石は1968年に当時高校生だった鈴木直氏が発見、佐藤准教授が38年後の2006年に新種として記載した。



「フタバズキリュウ～もうひとつの物語」の著者の佐藤たまきさん

佐藤准教授は古生物学者を志して首長竜の専門家になった自らの半生を紹介、標本の記載という仕事は「100年後の研究者が利用できる基本データをつくる重要な仕事」などと話した。参加者からは著書を書くに至った経緯などについて活発な質問があった。カフェには、JASTJ賞選考委員の白川英樹・筑波大学名誉教授、相澤益男・科学技術振興機構顧問を含め15人が参加した。（副会長 滝順一）

第18期 JASTJ塾が開講

9月5日、東京・内幸町の日本プレスセンター会議室で、第18期科学ジャーナリスト塾が開講した。今期の入塾者は15期塾生1人、17期塾生2人を含む21人で、ライター、科学コミュニケーター、現役研究者、国際環境NGO職員、弁理士、森林インストラクター、中央官僚、大学史料編纂室職員など、例年にも増して多彩な顔ぶれとなった。

開講式では運営メンバーの紹介、カリキュラムの説明などを行った後、佐藤年緒会長ら多くの理事が見守る中、塾生ひとりひとりが自己紹介と入塾の動機を発表した。室山哲也塾長からの「ジャーナリズムの基本はコミュニケーション力であり、その人物が浮かび上がるような、いい質問ができるかどうか大切」との

指摘に、塾生たちは早速、活発に手を挙げ、ときどき笑い声を上げながらお互いを知る時間を持った。

「伝える技術を身につけたい」と集まった塾生は、半年間のカリキュラム

のなかで、独自のテーマで企画を立て、文章かプレゼンテーションの作品を作り上げる。互いの学び合いも重視する本講座で、今年はどうのような“化学反応”が生まれるのかが楽しみだ。

（副会長／副塾長 瀧澤美奈子）



多彩な顔ぶれの塾生たちの自己紹介から始まった18期ジャーナリスト塾。（撮影 都丸亜希子）

J賞受賞者が語る 科学技術ジャーナリズムの役割

JASTJの科学ジャーナリスト賞2019を受賞した山本義隆氏が、岩波書店発行の「図書」9月号に寄稿した「科学技術ジャーナリズムの役割」の中で受賞について触れている。

受賞対象になったのは書籍「近代日本一五〇年——科学技術総力戦体制の破綻」だが、山本氏はこの受賞

をきっかけに科学技術ジャーナリズムが何をすべきかを考えたという。その一端は受賞時の挨拶で披露され、会報91号にも紹介したが、今回の寄稿ではその内容をより詳しく書いている。JASTJ賞の受賞作で日本の科学技術体制に鋭い批判を展開した山本氏が、科学技術ジャーナリズムについてどう考えているかを知るには格好の文章だ。

結論にある「『啓蒙』より『批判』を」というメッセージは、科学ジャーナリストに対する叱咤であり、激励となろう。（理事 中道徹）

SDGsは人類の未来を切りひらくか

蟹江憲史・慶應義塾大学教授に聞く

報道される機会も増えているとおり、SDGs (Sustainable Development Goals) は持続可能な世の中をつくるための開発目標を指す。地球規模の視野で諸問題に取り組むようにと国連が提唱、各国も導入を進めつつある。6月21日に開いた例会では「SDGsは人類の未来を切りひらくか？」をテーマに、慶應義塾大学の蟹江憲史教授を日本プレスセンターに招いてSDGsの現状と課題を聞いた。

だれも取り残さず持続可能社会を

SDGsについては、国連がハイレベル政治フォーラム (HLFP) を定期的に開催、日本政府も「ジャパンSDGsアワード」を設けて国内外の優れた取り組みを表彰している。企業や大学でも経営にSDGsを導入する試みが進んでおり、国内でも普及し始めた。

「2030年の世界の形として、持続可能な世の中をつくるために必要な17種類の目標と169種類の指標を示したもの」——。重要そうだが、わかりにくいという声もあるSDGsについて、蟹江さんはこう解説した。法的な規定の策定や政治的な対立に関わることよりも、国際的な合意形成を優先し、環境、経済、社会の観点から「だれ一人として取り残さない」という理念を掲げて激変する時代に向き合おうという狙いだ。

きっかけは、12年にブラジルのリオデジャネイロで開かれた「国連持続可能な開発会議 (リオ+20)」で議題になった「われわれの求める未来」。日本を含め、予定の30カ国を上回る70カ国が参加したことから、当時の強い関心が伺える。

SDGsの特徴は、3つある。まず、ルール作りでは



SDGsが目指す17の目標についてパワーポイントで説明する蟹江さんと参加者ら。
(撮影 いずれも柏野裕美)

なく目標作りから始めていること。自主性、自発性を重視し、実現方法については実践する組織や個人のアイデアとリソースに委ねる。国連でも初の試みで「新しいグローバルガバナンスの仕組みを提示している」と蟹江氏は考えている。2つ目が、進捗状況を測るの



蟹江憲史・慶應義塾大学教授

に国連ではマクロに、国や企業ではローカルに、という新しい物差しを提供していること。3つ目が、新しいアプローチを示していることだ。

取り組むことで新たな好循環へ

成功事例として、蟹江さんは再生可能エネルギー100%による印刷を実現した会社の試みや、富士フィルムホールディングスがSDGsによる評価内容を公開している事例なども紹介した。「うまくいっていることと、出来ていないことの両方をあえて見せる。それが次のイノベーションにつながる」と、SDGsへの取り組みによって新たな好循環が生まれることが重要と指摘した。

最後の質疑応答で、参加していた記者の一人は「SDGsは接着剤のような役割。今までの自分の領域から自分の出来ることを広げてみる。自分の人脈以外のところへ出向いて取材してみる。それが可能になるのがSDGsの取材だ」と語った。一方、SDGsへの懐疑的な意見もあった。「目標を複数掲げることにより、個別の大きな課題への問題意識が薄まることはないのか」と——。

蟹江さんは「課題への取り組みには、総合的アプローチと個別的アプローチがある。例えばプラスチックごみ問題ではSDGsの総合的アプローチができたからこそ、海洋問題への理解を社会で広められた。温暖化など、個別の問題では立ち行かなくなる時、複雑な諸問題を総合的にみることによって解決の糸口が得られるかもしれない」と答えた。

SDGsのゴールである2030年の社会が真の意味で持続可能となるように、いま私たちに何ができるのか。考え語り合う好機となった。(会員 館野佐保)

メディアの地殻変動をひも解く

亀松太郎・あしたメディア研究会代表に聞く

ウェブジャーナリズムがメディア界全体に地殻変動を起こしている。紙媒体は購読者を減らし、廃刊に追い込まれる雑誌は後を絶たない。新聞やテレビなどの伝統メディアも苦戦が続いている。7月10日に東京・内幸町の日本プレスセンター会議室で開いた月例会は、ウェブメディアに詳しい亀松太郎・あしたメディア研究会代表を招き、「ウェブジャーナリズムの可能性～激変を遂げるメディア業界～」をテーマに話を聞いた。

急速に変化するニュースとの接点

亀松さんは講演を始めるにあたって、まずこの日の参加者に日ごろニュースをどのように収集しているか、オンラインアンケートで聞いた。それぞれ自分のスマホやパソコンから回答を打ち込むと、スマホ47%、テレビ29%、パソコン17%という結果が即座にスクリーンに映し出された。「スマホが9割超という大学生とは大きな違いがある」と、世代とともにメディア環境が急速に変化している点を亀松さんは指摘した。

ウェブメディアのLINEニュースについては「知っているが使ったことはない」との回答が半数を超えた。一方、Yahoo!ニュースについては会場の75%が「週に1度は利用する」と答えたが、大学生にはLINEニュースの方がよく読まれている事実を明らかにし、世代間でニュースへの接点の違いが大きいことを浮き彫りにした。

元新聞記者だった亀松さんは、伝統メディアからウェブメディアまで渡り歩いた自身の経験を踏まえ、話題はウェブジャーナリズムの現状と課題に



ネット炎上の経験と動画中継に見たウェブの力について話す亀松さんの講演に聞き入る参加者 (撮影 いずれも柏野裕美)

移った。ニュースサイトのJ-CASTで初めて編集者になったとき、立ち上げたコーナーに掲載した記事が炎上。公開1日で批判と抗議の投稿が1000件を超えた。しかし記事の執筆者は「信念を持って書いている」と訂正記事は出さなかったという。何度も掛け合い、ようやく筆者が釈明記事を出し事態は収束。「炎上は、ネットメディアの宿命」と亀松さんは振り返った。



あしたメディア研究会代表の亀松太郎さん

その後、ドワンゴに移り、ニコニコニュース編集部を立ち上げた。その動画ニュースでは東日本大震災後に連日開かれた東京電力の記者会見を延々と流し続け、一気に視聴者を増やした。一番印象深いのは、震災から2週間後に、車の中からカメラが捉えた被災地の様子を流し続けたことだ。ニコニコでは視聴者が書き込むコメントが動画上に流れるようにしたため、リアルタイムで視聴者の反応が得られる。従来のメディアにはないウェブの力を強く実感したという。

ウェブジャーナリズムの特長と課題

ウェブメディアは、プラットフォームとパブリッシャーで構成される。Yahoo!ニュースやSmartNewsなどが前者、朝日新聞など記事を作る側が後者だ。前者は後者から記事の提供を受けて配信する。ただ、社会への波及力は前者が圧倒的で、Yahoo!ニュースはその最たるものだ。300社ものパブリッシャーから記事の提供を受け、1日4000本以上の記事を配信する。ページビューは後者が月間1～5億にとどまるのに対し、前者は100億以上とその差は歴然だという。

現代は個人がスマホ1台で情報発信ができる時代だ。リアルタイムで双方向、さらにウェブ上に膨大な情報がいつでも利用できる形で蓄積されていく。これが「ウェブジャーナリズムの特長であり、課題にもつながる」と亀松さんは指摘した。質疑応答では、ニュースの信ぴょう性の担保や、広告の仕組みなどが話題に上がった。(理事／副編集長 柏野裕美)

科学ジャーナリスト塾で学んだこと

私はふだん自然科学の雑誌・書籍の編集をしている。獣医師向けの媒体に関わるが多かったが、あるとき犬猫の飼い主にも分かりやすい「感染症」の本に携わるようになった。医学的な内容を誰にでも伝わるように書くのは想像以上に難しく、たちまち行き詰まってしまった。そんなとき、日本科学技術ジャーナリスト会議の塾の存在を知った。講師は新聞やテレビなどで多くの人に科学を伝える仕事をしている人たちだ。そんなプロの技術を学びたいと思い、16、17期と連続して参加した。

難問に挑む動物園取材

塾では、メディアにおける企画・編集を座学や取材活動を通して学び、最後に自由なテーマを選んで「文章」か「プレゼンテーション」として発表する。16期で私は、文章の課題を選択した。テーマに選んだのは、日本の動物園が抱える問題だ。

「日本の動物園でゾウが見られなくなるかもしれない」——。少し前に、私はたまたまそんな話を耳にしていた。日本の動物園は、敷地が狭いことや飼育法の違いから海外での輸入条件を満たせず、新しい動物を取得するのに苦戦している。さらに、最大の陸上動物であるゾウは人工繁殖も容易でなく八方塞がりだ。そんな理由で日本の動物園のゾウは減り続けている。この問題の解決に、①ゾウ本来の生活を再現する、②人がゾウをトレーニングして健康管

飼育係がトレーニングで健康管理をする多摩動物園のゾウ
(撮影 村上美由紀)



酪農家と研究者が共同で健康状態などの調査を続けている被災した牛たち
(提供 岡田啓司・岩手大学教授)

理を行う、そんな相反する2つのアプローチで多摩動物園が取り組んでいることを知り、その挑戦を取材した。

また16期の授業では、三鷹の国立天文台でふたご座流星群の観察会にも参加した。そこで講師役をされた縣秀彦准教授の話が、天文知識のない私にも大変分かりやすく、感銘を受けた。私自身、「旅先で星空を楽しむ方法を紹介する本が作りたい」と考えていたこともあり、先生に書籍の執筆をお願いし、この夏に『日本の星空ツーリズム』(12ページに関連記事)を出版するチャンスも得た。



村上美由紀さん

被曝牛取材で知る終わらぬ被害

一方、17期では、プレゼンテーションの課題を選択した。東北の獣医大学の教授らが、福島第一原発事故で被災した牛たちの被曝状況やその後の健康状態を、酪農家と一緒に調査していることを知ったためだ。この話を聞いたとき、私は「なぜ出荷できない牛を飼っているのか。なぜ被災者である酪農家が自ら調査に参加しているのか」という疑問を持った。

そこで調査グループの一般社団法人・原発事故被災動物と環境研究会に取材を申し込んだところ、ちょうど理事会が岩手県で開かれる時期だったため、そこに参加させてもらった。福島の現場取材はできなかったが、研究者と酪農家に話を聞くことはできた。ただ、社会的に非常に難しいテーマであり、私の力不足で上手くまとめることができなかった。それも今後の課題の一つだと思っている。

事故から8年経っても研究に取り組む彼らの姿からは、二度と事故を起こしてはならないという反省のために後世に科学データを残すという信念と、原発事故という終わりが見えない被害の悲惨さを改めて考えさせられた。

「短い言葉で、正確に分かりやすく」——。16、17期の塾で科学ジャーナリズムに不可欠なこんな文章作りを学んだが、その実践は難しく奥が深いことを改めて知った。今後の仕事に塾での経験を活かせるよう努力していきたい。(会員 村上美由紀)

アポロ11号が教えたメディアの役割

アポロ11号の月着陸から50年。アポロが写し出した「宇宙に浮かぶ青い、小さな地球像」が地球環境問題に火をつけ、「科学技術にも負の面がある」「それをチェックするのが科学ジャーナリストの役割だ」と本会報90号に記した。アポロの月着陸に関連して実はもう一つ、日本の自動車産業を育てた「予想外のメディアの功績」があった。

「月に人類を送り込むという偉業をどうやって達成したのか、その秘密を探れ」という社命のもと、朝日新聞は特別取材班を米国に送り込んだ。私を含む5人の記者が3か月間、全米を走り回って得た結果は「これだ、という特別の科学技術の成果はない。強いて挙げれば品質管理の技術を徹底したことだろう」ということになり、連載「米航空宇宙局(NASA)」にもそう書いた。

ちょうどそのころ、日本車の代表ともいべき「コロナ」「ブルーバード」に欠陥があると米国で指摘され、「欠陥車騒動」が起きた。日本もマイカー時代に突入したころで読者の関心も高く、「今日はスバル、明日は三菱」と新聞は書き立てた。

自動車産業は新聞の大スポンサーである。「新聞は日本の自動車産業をつぶすか」と怒鳴り込んできた



「宇宙に浮かぶ青い、小さな地球」像を印象付けたアポロ11号は、日本の自動車産業の躍進にも一役買っていた。
(写真はNASA提供)

が、当時の新聞社幹部は「車に欠陥があったら走る凶器になる」と一歩も引かなかった。

そこで日本の自動車産業の技術者たちが考えたのが、「品質管理技術」の導入だった。米国の航空宇宙産業では品質管理を重視していたが、自動車産業ではまだ導入していなかった。自動車産業では、日本が米国より一足早く「チェック、チェック、またチェック」の品質管理技術を導入、日本車の品質が一気に高まった。

私は、大学などでジャーナリズムの講義をするとき、よくこの話をする。メディアは、何か欠陥があると、まるで鬼のクビをとったかのように書き立てて「けしからん」という人が多いが、それがジャーナリズムの本来の役割であり、厳しい言葉ほど健全に育てるための「勇気あるチェック」なのだ、と。

月面に初めて降り立ったアームストロング船長の第一声は、「一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍だ」というものだった。そこでひと言。「日本の自動車産業にとって欠陥車騒動は小さな一歩だったが、日本車の未来にとっては偉大な前進だった」といったら、「思い上がるな」と言われるだろうか。(理事 柴田鉄治)

WEB編集長から

いつもJASTJホームページをご覧くださいありがとうございます。WEB編集長に就任してから今回が初のコラムです。6月以降に10記事以上をウェブにアップしてきましたが、その中でいくつかの記事を報告します。会員の皆様に有益な情報を多数掲載しておりますので、ぜひJASTJサイトからご覧ください。

■ 科学ジャーナリスト世界会議

7月1日から5日まで、スイスのローザンヌ工科大学をメイン会場として開かれた第11回科学ジャーナリスト世界会議ローザンヌ大会(WCSJ2019 Lausanne)は、83カ国から千人余りが参加し、JASTJ会員も10人が参加しました。高橋真理子理事がスイスのニュースサイトで取り上げられた記事も掲載しています。本会報でも詳しく紹介していますので、あわせてお読みください。

■ AI連続勉強会と科学ジャーナリスト塾

JASTJ主催の連続勉強会「AI企業の本音～私たちは社会をどう変えていきたいのか」の参加者募集記事を掲載

しました。AI最先端の動向を学ぶため8月26日に第1回を開催、10月9日まで5回シリーズで起業家や有識者らを招いて開きます。

また、9月5日に開講式を開いて始まった第18期科学ジャーナリスト塾の募集記事を掲載しました。すでに8月31日に締め切りましたが、今期もJASTJ理事らベテラン講師陣による、合計11回の充実した内容となっています。

■ 「科学ジャーナリスト賞2019」贈呈式

毎年恒例の科学ジャーナリスト賞贈呈式報告記事を掲載しました。近年には珍しい大賞2件、しかも映像と展示企画とあって制作秘話をじっくり聞くことができる興味深い贈呈式となりました。当日参加できなかった方は、こちらから贈呈式の模様をご覧ください。

皆様からJASTJウェブサイトに関するご意見をまだ伺ったことがないので、ご要望、ご感想などがありましたら、ぜひ事務局までご連絡ください。

(Web編集長 湯浅誠)

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2019年9月現在)

 <p>AE 海老名・綾瀬法律事務所 <small>科学技術に強い法律事務所です。 弁護士 中道 徹 (神奈川県弁護士会)</small></p> <p>AE 海老名・綾瀬法律事務所</p>	 <p>東京理科大学 <small>Tokyo University of Science</small></p> <p>東京理科大学</p>
 <p>ELSEVIER</p> <p>エルゼビア・ジャパン株式会社</p>	<p>TOSHIBA</p> <p>株式会社東芝</p>
 <p>花王株式会社</p>	 <p>公益社団法人 日本アイソトープ協会 <small>Japan Radioisotope Association</small></p> <p>公益社団法人 日本アイソトープ協会</p>
 <p>国立研究開発法人 科学技術振興機構 <small>Japan Science and Technology Agency</small></p> <p>国立研究開発法人 科学技術振興機構</p>	 <p>株式会社 日本医工研究所 <small>Japan Medical Engineering Institute</small></p> <p>株式会社日本医工研究所</p>
<p>CACTUS</p> <p>カクタス・コミュニケーションズ株式会社</p>	 <p>JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE 日本学術振興会</p> <p>日本学術振興会</p>
 <p>構造計画研究所 <small>KOZO KEIKAKU ENGINEERING Inc.</small></p> <p>株式会社構造計画研究所</p>	 <p>MAMEZOU HOLDINGS</p> <p>株式会社豆蔵ホールディングス</p>
<p>SUNTORY</p> <p>サントリーホールディングス株式会社</p>	 <p>国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構</p>
 <p>一般財団法人 新技術振興渡辺記念会</p>	<p>ROHTO</p> <p>ロート製薬株式会社</p>

■ 新入会員の自己紹介

● 柴田 佳秀 (フリーランス)

フリーランスとして、生物関連の書籍の執筆や監修、自然番組の監修などをしております。2005年までは制作会社にディレクターとして勤務。NHK生きもの地球紀行、地球ふしぎ大自然などを制作しておりました。

● 宮澤 直美 (フリーランス)

学部は物理学科で過ごし、博士課程では医療系の研究をしました。体調を崩して、研究からは遠ざかりましたが、脱サラしてフリーター歴11年、ボランティアで科学サロンのお手伝いも続けています。高校で講師をすることもあり、広く科学を知ってもらえる何かを自分で出来ないかと模索中です。第15期科学ジャーナリスト塾への参加はとても良い経験になりました。

● 西村 健一 (geneXplain)

外国企業・団体が日本に進出する際のお手伝いをしていきます。現在、ドイツのバイオ・インフォマティクス・ベンチャーgeneXplain社の Genome Enhancerの認知度向上と普及に力を入れています。

● 井上 能行 (東京新聞)

20世紀の知識しかありません。再び、勉強だと思ひ、入会させていただきます。昔のように親しく付き合ってください。

● 玉井 裕也 (厚生労働省医政局医事課)

健康・医療・福祉に関する政策・施策についての広報のためのパンフレットやウェブサイトの作成にあたって、どのように文章を書くかということの重要性を感じている。より深く関わるきっかけにしたい。

● 中村 玲子 (フリーライター)

文系のため、用語や数式等わからないことだらけ。そのため、難解な科学技術を、よりわかりやすく正確に伝えるにはどうしたらいいのか、ということに関心があります。科学技術系、環境、再生可能エネルギー系を担当する機会が多かったです。

退会

鈴木友、松野元子、阪本浩夫 (ご逝去)

■ 賛助会員の自己紹介

● 株式会社豆蔵ホールディングス

(野田伊佐夫・眞野由梨香)

私たち豆蔵ホールディングスグループはコンピュータソフトウェア技術の最先端をリードする技術集団です。生活スタイルの変化や産業プロセスの核心に直結するシステム構築と運用を担っております。何卒よろしくご依頼致します。

編集後記

▶「会報を多彩に彩るサイエンス」と川柳に綴りたくなるほど、科学ジャーナリスト世界会議、サイエンス・ブック・カフェにAI勉強会、塾の開講と多彩な行事が目白押しだった。サイエンスを軸にさまざまなテーマで集まる会員同士の交流はますます深められたのではないだろうか。(裕) ▶活動が盛り沢山で、驚いています。(K)

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

会員の BOOKS

新刊紹介

「150年前の科学誌『NATURE』には何が書かれていたのか」

瀧澤美奈子 著 (ベレ出版・1500円+税・2019年7月)



科学雑誌『ネイチャー』が今秋創刊150周年を迎えるが、本書では創刊当時のネイチャーの記事を紹介した。科学技術と社会の未来を考えるのに歴史的な認識が欠かせないと考えていた矢先に、町の古本屋で100年前の洋雑誌を見つけたのがきっかけで、本書のアイデアを思いついた。当時のネイチャー誌に「国家予算」や「女性の高等教育」など現在と重なる話題があることも面白いが、社会・文化と科学の接点が溢れており、彼らがいかに「科学と社会の良い関係」を作ろうとしていたかが分かった。(副会長 瀧澤美奈子)

「さまよえる地震予知 追いつけた記者の証言」

横山裕道 著 (紫峰出版・1800円+税・2019年8月)



東海地震の予知を目指して法律(大震法)までできたが、専門家によって「地震予知は一般的に困難」という報告書がまとまった。ところが、政府は南海トラフ地震に関して「地震発生の可能性の高まり」程度のことは言えとし、いざという時に気象庁が南海トラフ地震臨時情報を出すことになった。このように混迷を深める地震予知にスポットを当てたのが本書。著者自身、「東海地震の予知は有望」と思い続けて取材に当たったことへの反省も込めた。

(会員 横山裕道)

「日本の星空ツーリズム 見かた★行きかた★楽しみかた」

縣秀彦 編著 (緑書房・1800円+税・2019年8月)



日本は、星空が綺麗な場所、星空案内人のいる施設が充実している“星空大国”だ。本書はそんな日本の星空名所を紹介するガイドブックである。最近では星空を観光資源としてアピールする自治体も増えており、環境保護を実現しながら、地域の活性化やナイトタイムエコノミーへの貢献も期待されている。初めて星空を見る人のために「星空の見かた」もQ&A形式でやさしく解説。ページをめくると美しい星空が広がり、満天の星空に会いに行きたくなるに違いない。

(会員 村上美由紀)